

東寺講堂持国天像の様式について

奥野 早輝子 (福井県教育委員会)

京都・東寺の講堂に安置される二十一体の仏像群は、承和6年(839)に開眼供養された現存最古の密教彫刻として貴重な作例である。大日如来を中心とした五仏、金剛波羅蜜多菩薩を中心とした五菩薩、不動明王を中心とした五大明王に梵天・帝釈天・四天王を合わせた構成は国内において他に例を見ない。その尊像構成に関しては、造立に深く関わった空海の密教思想が反映されたものとして研究が重ねられ、個々の尊像に関しては、主に空海による新来の図像が彫刻化されたという観点から論じられてきた。東寺講堂諸尊に関する研究は、空海の密教思想の独自性や、その影響力の大きさを指摘するものが多くを占めていたといえる。その一方で、講堂内須弥壇の四方に安置される四天王像に関しては、諸尊構成を論じる上で言及されることは少なかった。尊像そのものの図像や様式に関しても、請来図像や先行作例との関係が考察されることはほとんどなかった。本発表では、東寺講堂四天王像の中でも特に造形的にすぐれているとされる持国天像(以下、「本像」とする)の様式について考察する。

空海は、入唐僧として恵果より密教の教えを伝授されたのち、大同元年(806)に帰朝する。空海は帰朝に際して、両部の大曼荼羅をはじめとした密教美術を請来した。そのうち、胎蔵曼荼羅や仁王經五方諸尊図には四天王が描かれているが、東寺講堂四天王像とは図像が異なる。また着甲法が日本の四天王像に特徴的な形式であることから、東寺講堂四天王像は空海請来による密教図像を彫刻化したものではなく、日本で制作されてきた四天王像の系譜に連なるものであると考えられる。全体に太造りで、特に脚部を太めに表す様式は、延暦10年(791)に制作され現在は興福寺北円堂に安置される四天王像に通じるものである。東寺講堂内に安置される諸尊が、空海が新来した密教世界を表しているとする、四天王像はある意味で異質なものであるといえよう。

本像は、これまで四肢の立体表現や激しい忿怒を表す顔貌表現にすぐれていると評されることが多かった。天曆5年(951)造立の六波羅蜜寺四天王像のうち持国天は、奥健夫氏が指摘されたように本像の模刻であると考えられ、本像は平安時代よりその造形に高い評価が与えられてきたことが想像できる。その理由として、本像が奈良時代以来の神将形像の様式を継承し、集めたことがあるものと推察される。本発表では、特に東大寺法華堂の厨子内に安置される執金剛神像との関係に着目する。

東寺講堂諸尊の造像は、造東寺所に属する仏工たちが行ったが、その造東寺所はかつて造東大寺司に属していた工人たちによって構成されていた。四天王をはじめとした神将形像は、東寺講堂諸尊の造立以前にも東大寺をはじめとした南都寺院で盛んに造像されてきた尊格であり、仏工たちの造像経験が結実したものが東寺講堂四天王像であったと考えられる。